

四智讃の背景思想について

宮坂 宥峻

0、はじめに

讃とはそもそも、『広辞苑』（第五版）を見るに「仏徳などをほめたたえる偈頌」とのことである。「偈頌」の項には「(梵語 gāthā の音写。偈と訳す)経・論などの中に、韻文の形で、仏徳を讃嘆し教理を述べたもの。また、それに準じて、仏教の教理を詩の形で述べたもの」とある。

真言宗智山派（総本山智積院）における法要では、節をつけて唱える真言が多数ある。正御影供あるいは月並御影供、もしくは理趣三昧を始めとする様々な法要で用いられる『智山法要次第』には、6つの讃（四智讃・心略讃・東方讃・西方讃・不動讃・仏讃）が載っている。その中でも四智讃は最もよく唱えられ、用途は広範多岐にわたる。勤行や修法においても頻繁に用いられ、これほど重んじられている真言であるにもかかわらず、その意味内容については諸説あり、和訳も確定しているとは言い難い。

本稿では、四智讃の出典を考察、従来の学説や訳例も参照しつつ意味内容の解説、その思想背景を探ることを目的とする。

1、四智讃の名称

『智山法要次第』には、奠供として「四智梵語」が次のように漢字表記されている¹⁾。

オム バンザラサトウバ ソギャラカ バンザララタンノウマド タラン
 唵 嚩日囉薩怛嚩蘇夔囉賀 嚩日囉囉怛曩摩覩怛嚩
 バンザラタラマキヤヤタイ バンザラネハラマキヤロハムバ
 嚩日囉達麼識夜那 嚩日囉羯磨迦嚩婆縛

『智山勤行法則』では次のように漢字表記されている²⁾。

頭 オム バンザラサトウバ
 唵 嚩日囉薩怛縛
 助 ソギャラカ バンザララタンノウマド タラン バンザラタラマキヤヤタイ バンザラネハラマ
 蘇夔囉賀・縛日囉囉怛曩摩覩怛覽・嚩日囉達麼識夜那・嚩日囉羯磨
 キヤロハムバ
 迦嚩婆縛

いずれも振り仮名付きで表記されている。

さらにまた、加行次第の中で、『十八道念誦次第』『金剛界念誦次第』『不動護摩私記』の各念誦次第には、四智讃を前供養の後に、舞儀拍掌を伴って唱えることになっている。これらはすべて平仮名表記である。

四智梵語は四智讃ともいう。声明として節（博士）付きで唱えられる「四智梵語」という名称よりも「四智讃」のほうが一般的な呼称である。「四智梵語」にしても「四智讃」にしても、経軌に典拠のある名称ではなく、各種の法要で用いられる際に便宜的に名付けられたものと考えられる。

真言陀羅尼はすべて梵語が元であるから、四智梵語のようにあえて「梵語」と呼ぶ必要はないはずであるが、これには真言としては珍しく漢訳が存在する。漢訳文のほうも、『智山法要次第』に収められている。伝法灌頂の金剛界法要や大曼荼羅供等の大法要において、四智漢語・心略漢語・四波羅蜜を声明として唱えることになっている。

おそらくは漢訳と対置して、漢訳文を四智漢語と呼び、梵語文を四智梵語と呼びならわすようにしたのであろう。

「心略梵語」も同様であろう。一般には「心略讃」と呼ばれる「心略梵語」にも漢訳があり、これを「心略漢語」と呼んでいる。

いずれも漢訳があること自体、珍しい例である。そこであえて、「梵語」「漢語」と呼ぶようになったのであろう。

次に「四智讃」の由来であるが、「四智」の意味については追って内容の検討をすることで明らかにしていきたい。この四智讃はもちろん真

言 (mantra) であるが、なぜ真言ではなく、讃 (原語は "stotra" または "stava") と呼ばれているのであろうか。

それは当然、「四智を讃えたもの」ということであろうが、如何なる意味で「四智を讃えた」ものとなっているのであろうか。

以上で一つ確実に明らかなことは、四智讃は四度加行の念誦次第や伝法灌頂や大曼荼羅供等の法要において金剛界に因んだ真言であるということである。胎藏界念誦次第や胎藏界の法要で用いられることはない

これを言い換えれば、四智讃は金剛界曼荼羅の典拠である『金剛頂経』に由来する真言であり、事実その通りである。

四智讃は『金剛頂経』の中では「金剛歌詠真言」「金剛讃詠」などと呼ばれている。

2、漢字音写と梵文

『金剛頂経』とは真言宗所依の經典であり、不空訳『金剛頂一切如来真實攝大乘現證大教王経』三卷³⁾(『三卷本』)のことをさす。

東密の伝統説によると、『金剛頂経』には「十八会十万頌」の広本があり、十八の部門(会)から成り立ち、十万の詩(頌)からできていたという。このすべてが整った完本は存在しないが、『十八会十万頌金剛頂経』を「広義の『金剛頂経』」と呼んでいる。不空三蔵が楞伽島⁴⁾から唐に請来し、その梗概を記したものが『金剛頂経瑜伽十八会指帰』⁵⁾(『十八会指帰』)である。

その第一会にあたる『初会金剛頂経』は、梵名 "Sarvatathāgatattvaśaṅgraha" から『真實撰経』とも別称され、「金剛界品」「降三世品」「遍調伏品」「一切義成就品」の四大品から構成される。『三卷本』は「金剛界品」の金剛界大曼荼羅を説く部分に相当し、これは「狭義の『金剛頂経』」と呼ばれる。

初めて『金剛頂経』系の經典を中国に伝えたのは金剛智三蔵であるが、南シナ海で暴風雨に遭い、沈没をまぬがれるため、十万頌の『金剛頂経』は海中に投げ込まれたという。金剛智が後に訳した『金剛頂瑜伽中略出念誦経』⁶⁾(『略出念誦経』)は、やはり初会の一部である。ただし、同じ『初会金剛頂

経』でも後に不空が伝えたものとは内容が異なり、現在、流布している現図曼荼羅系の金剛界曼荼羅を説く經典ではない。『金剛頂経』にはいくつかの系統があり、また最初から「十八会十万頌」の広本があったとは考えにくい。最終的に十八会に展開する構想で『金剛頂経』は次第に増広されていったものと考えられる。

『初会金剛頂経』のすべてを漢訳したものとして宋代の施護訳『仏説一切如来真实撰大乘現証三昧大教王経』三十卷⁷⁾(『三十卷本』)がある。不空訳より二百年以上経た十世紀末の翻訳ということもあり、量的にも内容的にも増広され、『初会金剛頂経』の完成態を示している。現存する梵本及び蔵訳ともよく対応する。

『三卷本』の最終の段に「次に四種の秘密供養を説く」といい、その際に唱えるべき「金剛歌詠真言」として、次のように漢字音写を載せている⁸⁾。

唵 嚩日囉 二合 薩怛 嚩 僧 藥 囉 賀 嚩 日 囉 嚩 怛 那 麼 努 怛 嚩
嚩 日 囉 達 摩 誡 那 奈 嚩 日 囉 羯 磨 迦 嚩 婆 嚩

また不空訳『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』には、悉曇と併記して次の漢字音写を載せている⁹⁾。同じ訳者であるため当然のことながら、表記自体はほぼ同じである。

唵 嚩 日 囉 二 合 薩 埵 僧 藥 囉 二 合 賀 嚩 日 囉 二 合 嚩 怛 曩 二 合 麼 努 多 嚩
嚩 日 囉 二 合 達 磨 誡 也 奈 嚩 日 囉 二 合 羯 磨 迦 路 婆 嚩

四智讃には漢訳があると先に記したが、『略出念誦経』に「金剛言詞」として次の漢訳を載せている¹⁰⁾。

四 金剛薩埵撰受故 得為無上金剛宝
金剛言詞歌詠故 願成金剛勝事業

これは『智山法要次第』にも四智漢語として載っているが、「勝事業」が「承

「勝事業」となっている。このことについて『常用陀羅尼と諸真言』に「勝事業」のほうが正しいとしている¹¹⁾。

またこれと異なる漢訳も同経典には載せている¹²⁾。

金剛薩埵撰授故 得成無上金剛宝
今以金剛法歌詠 願爲我作金剛業

梵文に関して『常用陀羅尼と諸真言』には次のように記されている¹³⁾。この出典は明記されていないが、浄厳和尚編・稲谷祐宣校注『普通真言藏』¹⁴⁾の悉曇表記とほぼ同じであり、これは真言宗の伝統的な悉曇表記に基づくものと思われる。

・智山本

oṃ vajra-saṃgrahā vajira-ratnam anuttaraṃ,
vajra-dharma-gāyanā vajra-karma-karo bhava.

また堀内寛仁氏の『初会金剛頂経』の校訂本には、次のような梵文が掲載されている¹⁵⁾。なお、この校訂本により、「金剛歌詠」「金剛言詞」として呼ばれているこの讚の原名は、"vajra-stuti-gītā"「金剛を称える偈」であることがわかる。

・堀内本

oṃ vajra-satva-saṃgrahād vajira-ratnam anuttaraṃ/
vajra-dharma-gāyanaiś ca vajra-karma-karo bhava//

比較すると、まず第1句目において、智山本の "vajra-sattva" に対して堀内本は "vajra-satva" となっている。正規の梵語では前者が正しいが、仏教梵語の用例では後者の例もよく見られるため、必ずしも間違いとは言えない。

次に大きく異なる点として、同じく第1句目の中で、"saṃgrahā" と "saṃgrahād" とが違う。前者の智山本のほうが漢字音写に近いが、『略出念

誦経』は「～故」となっており、それは後者の堀内本の読み方と一致する。

次にまた、第3句の末尾も智山本のほうが漢字音写に近いが、『略出念誦経』は「～故」「以～」となっており、やはり堀内本と一致する。

全体の意味の取り方として、4句をすべて独立した文と見なすのか、第1句を第2句の理由、第3句を第4句の理由の文のように見なし、第1句・第2句と第3句・第4句を対の文と考えるのか。漢字音写ならびに伝統的な悉曇表記と智山本を見る限りでは前者の立場であり、『略出念誦経』と堀内本は後者の立場をとっているように見受けられる。

もう一点、堀内本では第3句の末に"ca"を補っている。これについて堀内氏は「追記」の中で「真言(讚)。第3句について」として、「伝承の讚文〔前讚・四智梵語という。〕ではcaがすべてないが、それでは7音節になるので、字数の上からはある方がよい。但し第3句はこれでは5長6短で、一応 metre に合わない。-dharmasya gāyanaiś とすれば5短になるが、今度は7短となって、また metre に合わない。(以下略)」と述べている。

これは要するに、真言がシュローカ調の韻律¹⁶⁾を踏んでいる(はずのもの)と捉え、それゆえに韻を合わせるため、伝承の讚文にない"ca"を補って校訂したということである。このことに関して既に指摘されたことがあるが¹⁷⁾、改めて整理しておく。

智山本を含めて、従来のさまざまな解説書には「四智梵語はシュローカ調の韻文である」と説明されているが、実は智山本の梵文は韻数の上から第3句が7音節で1音節足りない。そのため堀内本では、「字数の上からはあるほうがよい」として"ca"を補っているのであるが、文法上は可能なことであっても、かなり不自然なことである。つまり、もし「四智梵語はシュローカ調の韻文ではない」とすれば、そのような補いは必要なく、従来の伝承的な表記のままでよいということになる。

また、冒頭の"om̐"を1音節として数えるかどうかという問題がある。『密教辞典』の「奠供」の項には、「その最初に唵(om̐)字のあるのを深秘とし」とあることから、これを深秘ではなく通常の偈頌として見た場合、"om̐"は韻律を整えるための音節と数えないほうがよいではないだろうか。そのような例は実際にあり、施護訳『佛説秘密三昧大教王経』の音写文には「唵」が

なく、次のようになっている¹⁸⁾。

嚩日囉二合薩怛嚩僧吃囉二合賀一句 嚩日囉二合囉怛那二句摩耨多囉一句
 嚩日囉二合達哩摩二合識引野乃一句 嚩日囉二合羯哩摩二合迦嚩婆嚩一句

この梵文にあたる智山本から om を省いた韻律を示すと次のようになる。

— U — U — U — / — U — U U — U — /
 — U — U — U — / — U — U U — UU //

一行目（第1句・第2句）と二行目（第3句・第4句）は完全に対句になっていることがわかる。しかし、これは韻数の上からシュローカ調とは言えない。

しかし冒頭に "om" を入れ、韻数を合わせるために第3句に "ca" を入れると、次のように対称性は崩れてしまう。

— U — U — U — / — U — U U — U — /
 — U — U — U — U / — U — U U — UU //

すなわち、単に全体の字数が合っているというのみであって、シュローカ調ではなくなってしまう。

以上のことから、次のことが結論付けられよう。

1. 四智讃はシュローカ調の韻文ではない。
2. 堀内本のように第3句に "ca" を補う必要がない。

3、従来和訳

四智讃は従来、どのように解釈され和訳されてきたかをみておきたい。本来ならば、各著の解説についても検討しなければならないが、紙数の関係上、和訳と依拠している梵文が掲載されているものについてのみ掲載することをご了承ください。

- (1) 梶尾詳雲『秘密事相の研究』 昭和 10 年¹⁹⁾
 「俺、金剛薩埵の摂受あるが故に、金剛宝は無上なり。金剛法の歌詠によりて、金剛の事業をなすものとならんことを」
 Oṃ vajra-sattva-saṃgrahād vajra-ratnaṃ anuttaraṃ,
 vajra-dharma-gāyanaiḥ vajra-karma-karo bhava.
- (2) 高井観海『秘密事相体系』 昭和 28 年²⁰⁾
 「金剛薩埵の摂受の故に、金剛宝は無上なり、金剛言詞の歌詠の故に、金剛の事業を成すことを願ふ」
 Oṃ vajra-sattva-saṃgrahād vajra-ratnaṃ anuttaraṃ
 vajra-dharma-gāyanaiḥ vajra-karma-karo bhava.
- (3) 大山公淳「中院流十八道次第の研究（下）」『密教文化』 29/30 昭和 31 年²¹⁾
 「金剛薩埵摂受の故金剛宝に無上を得、金剛言詞の歌詠により金剛の勝れた事業を成就せんことを願う」
 Oṃ vajra-sattva-saṃgrahād vajra ratnaṃ anuttaraṃ,
 vajra-dharma-gāyanaiḥ vajra-karma-karo-bhava.
- (4) 田久保周譽『真言陀羅尼藏の解説』 昭和 35 年²²⁾
 「金剛薩埵の摂受有るが故に無上の金剛宝は有り、金剛教法を諷詠するが故に汝は金剛法修行者と為れかし」
 Oṃ vajra-sattva-saṃgrahā vajra ratnaṃ anuttaraṃ,
 vajra-dharma-gāyanā vajra-karma-karo bhava.
- (5) 智山教化資料第 4 集『常用陀羅尼と諸真言』 昭和 45 年²³⁾
 「金剛薩埵の摂受あれば、無上金剛宝を（得）。金剛法を歌い詠ずれば、金剛業を成ぜられかし」
 Oṃ vajra-sattva-saṃgrahā/ vajra-ratnaṃ anuttaraṃ/
 vajra-dharma-gāyanā/ vajra-karma-karo bhava/

- (6) 岡秀友訳『仏典Ⅱ』世界古典文学全集 7 昭和 42 年²⁴⁾
「オーン、金剛薩埵の摂受によるがゆえに、金剛宝は無上なり。金剛法を歌うがゆえに、金剛をなすものと（なんじは）なれ」
- (7) 頼富本宏『現代密教講座』4 昭和 50 年²⁵⁾
「オーン、金剛薩埵によって摂し取られるから、金剛の宝は無上である。金剛の法を詠ずることによって、金剛の事業をなすものとならんことを」
Om vajra-satva-saṃgrahād vajra-ratnaṃ anuttaraṃ,
vajra-dharma-gāyanair vajra-karma-karo bhava.
- (8) 岩本裕『仏教聖典選』第 7 巻 昭和 50 年²⁶⁾
「オーン、金剛薩埵に庇護されているが故に、金剛宝は無上なり。金剛法の歌詠によって、金剛の行為を作す者であれ」
- (9) 真言宗豊山派宗務所『真言宗諸経要集解説』昭和 52 年²⁷⁾
「金剛薩埵よ。われらは金剛薩埵の慈悲の御手に包まれ救われているのであるから、護念を得てわれら凡夫は直ちに無上の金剛宝となり、金剛薩埵同体の仏体となることができる。いま薩埵の金剛不壊なる言葉をもって薩埵の教法を詠ずるがゆえに、この歌詠の功德によって、金剛不壊なる教法を受持するものとしてふさわしい修行を成就することができるよう願うばかりである。」
Om vajra-satva-saṃgrahā vajra-ratnaṃ anuttaraṃ,
vajra-dharma-gāyanā vajra-karma-karo bhava.
- (10) 坂内龍雄『真言陀羅尼』昭和 56 年²⁸⁾
「オーン、金剛薩埵が（みむねに）摂受するが故に無上金剛宝を得、金剛法を歌い詠ずれば金剛業（承仕）を成ぜられかし」
Om vajra-satva-saṃgrahā vajra-ratnaṃ anuttaraṃ,
vajra-dharma-gāyanā vajra-karma-karo bhava.

- (11) 八田幸雄 『真言事典』 昭和 60 年²⁹⁾
 「オーム。金剛薩埵摂受によるが故に、金剛宝は無上なり、金剛法の歌詠によって而して金剛業をなすものであれかし」
 Oṃ vajra-satva-saṃgrahād vajra-ratnam anuttaraṃ,
 vajra-dharma-gāyanaiś ca vajra-karma-karo bhava.
- (12) 津田真一 『和訳金剛頂経』 平成 7 年³⁰⁾
 「オーム、金剛薩埵の摂受よりして無上なる金剛宝が（あれ）。そして、諸の金剛法の歌詠によって（汝は）金剛業を作すものであれ。」
 [オーム、ヴァジュラサトヴァサングラハード・ヴァジュララトナム・アヌッタラム・ヴァジュラダルマガーヤナイシュ・チャ・ヴァジュラカルマカローブハヴァ]
- (13) 高橋尚夫 「金剛界曼荼羅とは」 『空海密教と四国遍路——マンダラの風景——』 平成 13 年³¹⁾
 「金剛薩埵摂受の故に 金剛宝は無上なり 金剛法の歌詠によって 金剛業をなすものとなれ」
- (14) 遠藤祐純 『金剛頂経入門 初会金剛頂経 金剛界品 金剛界大曼荼羅 <三巻本>』 平成 18 年³²⁾
 「オーム、金剛薩埵が摂受するが故に、金剛宝は無上なり、金剛法の歌詠により、金剛業は作すものになる」
 Oṃ vajra-satva-saṃgrahād vajra-ratnam anuttaraṃ,
 vajra-dharma-gāyanaiś ca vajra-karma-karo bhava.
- (15) 智山伝法院 『智山の真言——常用經典における真言の解説——』 平成 22 年³³⁾
 「オーン、あなたは金剛のように堅固な菩提心を発すことにより、金剛のように堅固な（確実に衆生に利益をもたらす）無上の宝となる。金剛のように堅固な（確実に衆生を導く）教法を詠じて、金剛

のように堅固な（確実に衆生を救済する）行為の実践者たれ。」

Oṃ vajra-satva-saṃgrahād vajra-ratnam anuttaraṃ,

vajra-dharma-gāyanair vajra-karma-karo bhava.

4-1、和訳の検討①

「オン バザラサトバ ソウギャラカ」

これより一句ずつ検討していく。

ここで問題は訳語の「摂受」の意味である。「金剛薩埵の摂受」とは、具体的にどのようなことを意味するのであろうか。なぜ、一見すると意味が解りにくい訳語が多様されているのか。その理由は、金剛智訳が「金剛薩埵摂受故」となっているからであろう。これを読み下すと「金剛薩埵の摂受あるが故に」である。多くの和訳例は、この漢訳語をそのまま使っているわけである。

この部分の梵文は先に論じたように、"vajra-sattva-saṃgrahād" である。"-saṃgrahā" という原文をあげている訳文も、すべて奪格に解している。つまり "-saṃgrahā" では意味がとれない。

先ず "vajra-sattva" について検討する。

"vajra-sattva" は通常、「金剛薩埵」と訳される。"vajra" は「金剛」であるが、これには二つの意味がある。武器としての「金剛杵」と、宝石としての「金剛石」である。頼富氏によれば、『金剛頂経』という場合の題名の「金剛」とは、その両者を統合したものと考えられる³⁴⁾。

インド密教は「金剛乘」(vajra-yāna) と呼ばれる。これは「小乗」(hīna-yāna)・「大乘」(mahā-yāna) に対比した呼称であるが、インド密教における「金剛」とは、特にことわりのない場合、「菩提心」そのものをさす。弘法大師空海も『金剛頂経開題』で「金剛頂」に衆生本有の菩提心が含意されることを説いている³⁵⁾。

次に「薩埵」と音写される "sattva" は、通常「衆生」と訳される。これは鳩摩羅什の旧訳であり、玄奘三蔵の新訳では「有情」と訳されるが、「衆生」の訳語のほうが一般に馴染み深い。現代では「人」と訳されることもある。

この語は「存在する」という意味の動詞語原/Asから派生した抽象名詞で、その本来の意味は「存在していること」もしくは「存在性」である。「本質」とも訳す。

「金剛薩埵」と訳される "vajra-sattva" は、一般には「金剛のように堅固な菩提心を有する人」という意味で考えられているが、第2句の "vajra-ratna" は「金剛の宝」、第3句の "vajra-dharma" は「金剛の法」、第4句の "vajra-karma" は「金剛の業」である。これらはいずれも「金剛のように堅固な（あるいは高貴な）もの」としての「宝」「法」「業」というように、解釈される。そこで第1句の "vajra-sattva" を「金剛の（ような堅固な）本質」という意味で捉えれば、それは「菩提心」そのものをさすことになるであろう。当然、"vajra-sattva" という合成語が通例として「金剛薩埵」を意味することは否定しがたく、それは含意することになるが、ここではその金剛薩埵の本質である「菩提心」そのものをさすと解釈したほうが合理的であると考えられる。

次に "saṃgraha" について、先述した通りこの語は「摂受」と漢訳されている。

問題は「摂受」の意味もさることながら、漢訳の「金剛薩埵摂受」の意味の取り方である。上掲の和訳の多くは、漢訳に基づいて「金剛薩埵の摂受」「金剛薩埵摂受」としているが、これは「金剛薩埵によって摂受される」のか、それとも「金剛薩埵が摂受する」のか。つまり誰が「金剛薩埵によって摂受される」のか、そして「金剛薩埵が摂受する」のは誰か、ということであるが、両者とも摂受する主体は金剛薩埵であるから、同じことである。では、この文の主体は金剛薩埵と考えてよいのであろうか。

これは漢訳が間違っているか否かではなく、漢訳文を如何に解釈するかという問題である。何故ならば、「金剛薩埵摂受故」を「金剛薩埵が摂受するが故に」と読み下すことは、仏教漢文として十分可能だからである。

しかしながらこの四智讚全体の主語は金剛薩埵であるかと問えば、それは無理である。文法上、この四智讚の中で動作の主体としての主語を示す語は、唯一、第4句に出てくる "bhava" であり、二人称の「汝」である。第4句で「汝」が主語として明示されているからして、第1句で主語が金剛薩埵となることはない。

では、「汝」とは誰であり、「汝」と呼びかけているのは誰であろうか。

その前に「摂受」の意味を確定しておきたい。"saṃgraha"には、さまざまな意味がある。語源は「把握する」という意味の動詞語根√Grahに「結合」「完全」を意味する接頭語がついた動詞の名詞形で、「様々なものをとりまとめて一つにする」「完全に自分のものにする」という意味である。

インドには、末尾に"-saṃgraha"と付く名称の書物が多くあるが、それらは一般に「～の梗概」と訳される。「～綱要書」という意味である。例えば、'*Tarka-saṃgraha*'は「論理学綱要書」である。論理 (tarka) に関する（論理を集めた）綱要書 (saṃgraha) という意味である。そもそも四智讃の大典である『金剛頂経』の梵名は、先にあげたように '*Sarva-tathāgata-tattva-saṃgrahaṃ nāma mahāyāna-sūtraṃ*'であり、その中に "saṃgraha" という語がある。「一切如来の真実を完全に一つに集めたもの」という意味の経題である。

以上の用例から明らかなことは、複合語として "-saṃgraha" の前に来る語が主格にはならない。'*Tarka-saṃgraha*'は「論理を集めたもの」であるから、論理が何かを集めたというものではない。「論理」は目的格であって主格ではない。『金剛頂経』の経題の '*Tattva-saṃgraha*'も同様に、「真実を集めた書物（経典）」であって、「真実」が何かを集めたものではない。

結論として、"-saṃgraha" の前枝の語は目的格に限る。そうである以上、「金剛薩埵」は "-saṃgraha" の主語ではなく、その目的語でなければならない。

しかして「金剛薩埵を集める」と解釈しても、それは具体的に如何なることであろうか。"-saṃgraha" の原意は、「完全に自分のものとする」ということである。「金剛薩埵を完全に自分のものとする」ということならば、これはこれで一応意味が通じるようにも思われる。

先に "vajra-sattva" は「菩提心」そのものをさすと解釈したほうが合理的であると考察した。それに従い、"vajra-sattva-saṃgraha" の真意を探ると、「菩提心を完全に自分のものとする」という意味になるであろう。菩提心は万人に備わっており、それを如何に自覚するかということが密教の基本的教理としてあるから、"vajra-sattva-saṃgraha" は、「自らにそなわった菩提心を掘り起こしてしっかり自覚すること」という意味に解するのが妥当であろうか。このように解釈することによって、この第1句は第2句につながるはずである。

4-1、和訳の検討②

「バザラアラタンノウ マドタラン」

第2句において上掲の和訳例は何れも大差ない。

第1句と同様、この句の主語は誰であろうか。多くの訳例が明らかに「金剛宝」を主語としている。しかし「金剛宝」を目的格に解することは、文法上、無理である。

仮に第2句がこれで完結した文であるならば、諸訳例のように「金剛宝は無上なり」という訳も可能であるが、この四智讃全体を一つの文と捉えるならば、第四句の "bhava" に含まれる「汝」が全体の主語となるのであって、それ以外が主語になることはありえないはずである。

よってこの第2句は、「汝は無上の金剛宝である」「汝は無上の金剛宝となる」と訳されよう。

何故、「無上の金剛宝となる」のかと言え、第1句にその理由が述べられている。

改めてこの箇所の金剛智訳を見ると、「得為無上金剛宝」である。「無上の金剛宝と為すことを得」と読み下すことができる。主語は明記されていないが、「汝は」と解するのが妥当ではなかろうか。少なくとも漢訳において「金剛宝」は主語と解されていない。

4-3、従来の和訳の検討③

「バザラタラマキャヤタイ」

第3句の "vajra-dharma-gāyanaiś" の訳し方は、何れも同様である。ここで「金剛法」とは何かという問題がある。

金剛智はこの第3句を「金剛言詞詠歌」「今以金剛法歌詠」と漢訳している。前者は「金剛言詞を歌詠するが故に」、後者は「今、金剛法の歌詠を以て」

と読み下すことができる。

仏教用語としての「法 (dharma)」には様々な意味があるが、ここでいうところの「法」とは、教法であり、それは「歌詠」されるものである。歌詠されるものとは、韻律を踏まえた詩歌に他ならない。漢訳ははっきり「金剛言詞」としている。「金剛のように堅固な教法の歌詠によって」というのが、この第3句の意味であろう。

ここでも問題は、その主語である。誰が歌詠をするのかというと、この句の中には明示されていないが、やはり「汝」と考えるべきであろう。なお、注意すべきこととして、「歌詠」という意味の原語の "gāyanā" は、ここでは "gāyanaiḥ" と複数形をとっている。

4-4、和訳の検討④

「バザラキヤラマキャロ ハンバ」

第4句の従来の訳も多少の表現の違いはあれど、意味上の違いはないと言える。この部分の金剛智の漢訳は、「願成金剛勝事業」と「願為我作金剛事」である。前者は「願はくは金剛勝事の業を成ぜんことを」、後者は「願はくは我に金剛事を作したまえ」と読み下すことができる。

『智山法要次第』では、この箇所は「願成金剛承事業」（「願はくは金剛承事の業を成ぜんことを」）となっている。

原文は、"vajra-karma-karo bhava" である。「汝は金剛のように堅固な行為をなす者たれ」という意味であり、この中に文法的問題は特にはない。

最後に、「汝」とは誰であり、「汝」と呼びかけているのは誰かという問題に戻ると、阿闍梨が行者を曼荼羅道場に導き入れて、菩提心を喚起するという場面が最も妥当であると考えられる。曼荼羅の道場において阿闍梨が行者に対して、「汝は菩提心を喚起することにより、無上の金剛宝となる」と告げることは、実に有意義なことである。更に、曼荼羅の道場において「無上の宝」となった行者は、金剛のように不壊堅固な教えを朗々と吟ずるのであ

る。それは金剛界曼荼羅の諸尊、ひいては一切如来としての毘盧遮那如来と一体化する修法のプロセスにおいて不可欠なことなのであろう。

5、四智讃の背景

ここまで四智讃の内容について見てきたが、この真言がなぜ「四智讃」あるいは「四智梵語」と呼ばれるのかという点を検討してみたい。

四智とは、金剛界四仏の四つの智慧のことである。四仏とは中尊毘盧遮那如来を囲む四方の阿閼・宝生・阿弥陀・不空成就の四如来であり、それぞれ大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智である。もし、この四智讃がこれらに言及したものであるならば、上記の疑問は不要であるが、四智讃の中には、いわゆる四仏の四智に直接言及した語がない。この四智に相当すると思われるものをあげると、それぞれ「金剛薩埵」「金剛宝」「金剛法」「金剛業」である。金剛界曼荼羅には、四仏それぞれが代表する四部族があり、それを「金剛部」「宝部」「法部」「羯摩部」という。それぞれの部族に四人の菩薩が四仏の四方に配されており、すなわち十六大菩薩である。その四部のそれぞれ筆頭の菩薩の名が、「金剛薩埵」「金剛宝菩薩」「金剛法菩薩」「金剛業菩薩」である。これが四智讃の中の四つの金剛に対応している。

『金剛頂経』には金剛界大曼荼羅の出生が説かれているが、順序からすると、まず成道前の釈尊に擬せられる一切義成就菩薩が一切如来の教導によって五相成身観という瞑想のプロセスにより、金剛界大菩薩という密教的存在と化し、ただちに金剛界如来（毘盧遮那）として成仏を遂げる。それを中心とする金剛界三十七尊の出生が展開するさまを描出するのが本経のテーマである。

毘盧遮那如来から諸尊が「出生」する順序として、まず毘盧遮那如来の四方に四仏が出生する。次にそれぞれの四仏の四方に菩薩が出生する。これが十六大菩薩である。

四仏は毘盧遮那如来を讃えるために、供養のかたちとして、毘盧遮那如来の四方に「金剛波羅蜜」「宝波羅蜜」「法波羅蜜」「羯摩波羅蜜」の四波羅蜜菩薩を出生する。

次に毘盧遮那如来は四仏の供養に応え、逆に四仏を供養するために、「喜」「鬘」「歌」「舞」の内四供養菩薩を出生する。

次に四仏は毘盧遮那如来の供養に応じて、さらに毘盧遮那如来を供養するために、「焼香」「華」「燈」「塗香」の外四供養菩薩を出生する。

最後に、毘盧遮那如来はさらにまたこれらの供養に応じて、「鉤」「索」「鎖」「鈴」の曼荼羅の門衛たる四摂菩薩を出生する。こうした一連の供養のあり方を「相互供養」という。

以上の毘盧遮那如来を中心に出生した四仏・十六大菩薩・内四供養菩薩・外四供養菩薩・四摂菩薩を合わせて、「金剛界三十七尊」となる。

『金剛頂経』では、このようにして出生した金剛界大曼荼羅について作壇法を記し、そこへ金剛阿闍梨が弟子を導入して灌頂を授ける儀式の仕方を述べる。灌頂の第一段階として、仏にかわって曼荼羅儀礼を指導する阿闍梨の作法について述べられる。「瓶灌頂」「金剛主灌頂」「金剛名灌頂」が説かれ、ここで投華得仏の儀礼により、金剛の弟子と呼ばれる修行者は金剛界曼荼羅に参入し、曼荼羅上の仏と一体化する。

これらの灌頂儀礼の最終段階において「四智讃」が説かれる。『三卷本』では「四種の秘密の供養」と名付けられている。経典では四智讃を載せた後に、次のように述べている³⁶⁾。

曼荼羅の中において、この金剛讃詠をもって、しかも歌い、金剛舞をもって、二手の掌および供養の花等をもって供養を作すべし。外の曼荼羅において、金剛香等を供養しおわって、本処におくべし、一切は力に随って、しかも供養せよ

『金剛界念誦次第』では、前供養の後に四智讃を唱えることになっている。その際、正式には四段作法と称して、内の四供養、すなわち「喜」「鬘」「歌」「舞」の印を結んで唱えるが、その典拠はここにある。さらに「観念」に続いて指導事項が記されている³⁷⁾。

毎日三時に常に此の讃を誦して佛の功德を讃ぜよ。本尊界會を驚覺し上

るに悲願を捨て下はず。無量の光明を以て行者を照触し業障重罪悉く皆消滅して心身安樂なり

- 一、金剛界大法の四智讃は四段作法を用う。この伝授を受けなければ十八道の場合もこれを用いてよろしい。
- 二、四段作法とは四智各別の印即ち内の四供養即ち嬉鬘歌舞の印を結んで唱える。初めに金剛合掌を心に当て少し額を下げて恭礼の意を表して「おんばざらさとばそうぎゃらか」の句を誦ず。これ喜菩薩の印である。次に額を上げ臂を少し伸ばして「ばざらあらたんのうまどたらん」と唱う。これ華鬘を捧ぐる意で鬘菩薩の印である。次に合掌を臍より次第に仰げ上げ口に向って散ずるとき「ばざらたらまきややたい」と唱えて即ち垂帯をなす。これ讃歎する意味の歌菩薩の印。次に両手を相向け胸の辺りで三度舞儀するとき「ばざらきやらま」と唱え、「きやろ」一拍「はん」一拍「ば」一拍す、但し最後の一拍のみ音を立てる。これ舞菩薩の印である。

これは前供養における「塗香」「時華」「焼香」「飲食」「灯明」の事供の直後に行う理供であり、象徴的な仕草によって「内の四供養」を行うわけである。

実際の修法の場面では、行者が舞儀を伴って自らこの四智讃を唱えることにより、一切如来の活動であるところの「相互供養」を象徴的なかたちで体験し、入我我入の境地を目指すことになるのであろう。

各種の法要において最初に奠供の所作を伴って四智讃を唱える場合、その唱えること自体が、無上の金剛宝たる金剛薩埵の活動としての金剛教法の歌詠そのものであると同時に、「相互供養」の実践そのものにほかならないと考えられてきたのではないだろうか。

6、結びにかえて —— 四印会への展開 ——

以上、ここまで四智讃について考察を加えてきた。梵文に関しては韻律が問題視され、堀内本にあるような補いは必要なく、またシュローカでもない

とした。従来の和訳に関しては紹介するに留まってしまったが、一定の内容理解はされたと思う。

論題でもある四智讃の思想背景とは、内の四供養を伴うことにより金剛界における一切如来の活動であるところの相互供養をあらわすものであった。

ここで先の疑問に戻ると、この真言が四智とありながらなぜ四菩薩を説くのか。言い換えれば、四智讃は金剛界曼荼羅を象徴するような真言でありながら、なぜ四智や四仏ではないのであろうか。

現図の金剛界九会曼荼羅に四印会という曼荼羅がある。金剛界曼荼羅を九つに展開したものの一つで、九会曼荼羅の西南（五番目）に位置している。この曼荼羅の構造は、中尊毘盧遮那如来の四方に「金剛薩埵」「金剛宝」「金剛法」「金剛業」が配置され、その間に四波羅蜜菩薩、四隅に内の四供養菩薩を配するというものである。

その構図は、まさに先の四智讃と類似していることがわかる。この曼荼羅の特徴は、精進の力に乏しい衆生が先の四つの曼荼羅では事作に堪えられず簡略を欲した故に説かれたものであり、成身会を簡約したものである³⁸⁾。言わば金剛界のエッセンスが四印会の曼荼羅である。四智讃において、四仏ではなく四菩薩が出てくる理由はここにあるのではないだろうか。

尤も四印会とのことに関しては、本論において論じていないのため、稿を改めて記していきたい。

註

- 1) 『智山法要次第』 pp2~3.
- 2) 『智山勤行法則』 pp74~75.
- 3) 『大正蔵』 No.865.
- 4) 楞伽島 セロイン、現在のスリランカ
- 5) 『大正蔵』 No.869
- 6) 『大正蔵』 No.866
- 7) 『大正蔵』 No.882
- 8) 『大正蔵』 18,p223a.
- 9) 『大正蔵』 19,No.957,p324.

- 10) 『大正蔵』 18,p248a
- 11) 智山教化資料第4集『常用陀羅尼と諸真言』（真言宗智山派宗務庁、昭和45年、増補改訂版、平成12年）p42.
- 12) 『大正蔵』 18,p253b.
- 13) 註11)に同じ
- 14) 浄厳和尚編・稲谷祐宣校注『普通真言蔵』（東方出版、昭和63年 新装第2刷）pp15~16.
- 15) 堀内寛仁『初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇（上）』（密教文化研究所、昭和58年）p208.
- 16) Śloka 『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』を始めとするインドでは広く親しまれている韻律
- 17) http://toxa.cocolog-nifty.com/phonetika/2004/10/post_8.html ウェブサイト [ta meta ta phonetika] にある。雑誌論文等にこのことを言及しているものは見当たらない。
- 18) 『大正蔵』 18,No883,p446b.
- 19) 梶尾祥雲『秘密事相の研究』（密教文化研究所、昭和10年）、pp313~314 『梶尾祥雲全集』第2巻（密教文化研究所、昭和57年）
- 20) 高井観海『秘密事相体系』（藤井佐兵衛、昭和28年、平成14年増補改訂版）p188.
- 21) 大山公淳「中院流十八道次第の研究（下）」『密教文化』29/30（昭和31年）pp30~31.
- 22) 田久保周譽『真言陀羅尼蔵の解説』（真言宗豊山派宗務所、昭和35年、昭和54年改訂増補三版）p79.
- 23) 『常用陀羅尼と諸真言』p35. 増補版p42.
- 24) 金岡秀友『仏典Ⅱ』（世界古典文学、筑摩書房、昭和42年 昭和42年5版所収ダラニ集）p415.
- 25) 頼富本宏『現代密教講座』4（大東文化社、昭和50年）p344. 『梵字大鑑』（智積院大学密教学会、昭和58年）p557.
- 26) 岩本裕『仏教聖典選』（密教聖典、読売新聞、昭和50年）p154.
- 27) 『真言宗諸経要集解説』（真言宗豊山派宗務所、昭和52年）pp61~62.

- 28) 坂内龍雄『真言陀羅尼』(平河出版、昭和56年) p125.
- 29) 八田幸雄『真言事典』(平河出版、昭和60年) p168.
- 30) 津田真一『和訳金剛頂經』(東京美術、平成7年) p383.
- 31) 高橋尚夫「金剛界曼荼羅とは」『空海密教と四国遍路——マンダラの風光——』(大法輪閣、平成13年) p183.
- 32) 遠藤祐純『金剛頂經入門 初会金剛頂經 金剛界品 金剛界大曼荼羅〈三卷本〉』(ノンブル社、平成18年) p383.
- 33) 『智山の真言——常用經典における真言の解説——』伝法院選書15(智山伝法院、平成22年) p125.
『智山の真言——金剛界念誦次第における真言の解説——』伝法院選書16(智山伝法院、平成24年) p276.
- 34) 頼富本宏『「金剛頂經」入門——即身成仏への道——』(大法輪閣、平成17年) p21.
- 35) 『弘法大師全集』第一輯。
- 36) 『大正蔵』18, p223.
- 37) 『金剛界念誦次第』 pp110~112.
- 38) 『大正蔵』18, p368b.